

# 中国語母語話者の日本語外来語彙 習得に関する諸問題

王 伸 子

## 1. はじめに

中国語を母語とする日本語学習者にとって学習困難なことの 하나가、いわゆるカタカナ語とも言われている、欧米系言語からの借用語である外来語であろう。中国語母語話者だけでなく英語やフランス語を母語とする学習者にとっても、発音が原音と乖離している、あるいは名詞、動詞等、品詞の用法がもとの言語と異なるなどの問題もあり、困難を感じる学習項目であることは確かである。しかし、中国語を母語とする学習者にとっては、とくに漢字表記による語彙は、母語である中国語と共通しているものもあり、その習得の速度も速いのだが、カタカナ表記による外来語に関しては、日本語の語彙に戸惑いを感じるようで、ほとんどの学習者が一様に難しいと訴える。

そこで、もっとシステムティックにこの種の外来語を教えるにはどうすればよいかということ提案するため、まず、日本語教育における外来語導入がどのように研究されているのかということと、前述したように、学習困難となる要因がはたして中国語の言語としての性質自体にあるのかということについても議論を試みる。本稿では、先行研究と中国での教育の側面を観察しながらその諸相を述べる。

## 2. 外来語の定義

日本語の外来語は、その借用過程を歴史的にみると、いくつかに分類される。簡単に観察すると、上代以降律令用語等で流入してきた中国語からの外来語、概ね室町時代以降に流入したタバコ、パン、ボタンなどのポルトガル語や、カステラなどのスペイン語からの外来語、そして、現在もその借用が続いているコンピュータ用語等の英語、ファッション用語等のフランス語等、現代ヨーロッパ語からの借用であるが、日本語教育で問題になるのはカタカナで表記されるもののうち、とくに現代の英語、フランス語などヨーロッパ系言語から流入している外来語である。

とくに、大学での日本語教育で関連があるのは、日常的に用いられる外来語のほか、アカデミックな場面で用いられるそれぞれの分野の専門用語、および現在では一般的にも使用されるコンピュータ関係のものである。本稿では、英語、フランス語、ドイツ語等、現代ヨーロッパ語から借用した、カタカナで表記するものと限定し、本稿では以後、外来語と表す。

## 3. 先行研究

外来語の研究は、史的研究および、言語としての語彙の研究等があげられるが、本稿では、日本語教育と関連性のある外国語教育の観点から見た語彙としての外来語研究を概観する。

まず、問題そのものの所在であるが、日本語教育における外来語の研究はその重要性が認識されつつも、まだ、全般的な研究が整っていないという印象を受ける。その点に関しては、陣内（2008）も、カタカナ語教育がまだ初期の段階だと述べている。また、同じ論文の中で、中国語を母語と

する学習者にカタカナ語（外来語）学習が必要か、カタカナ語（外来語）がわからなくて困ったことがあったかなどのアンケート調査を行い、中国語を母語とする学習者が実際に外来語の部分に日本語学習の困難点を見出し、その学習が必要だと感じている者が大半であることを細かく分類して述べている。

堀場他（2008）では、中国語を母語とする日本語学習者と、英語を母語とする日本語学習者に、対象語彙200個を与え、文章を多肢選択方式で穴埋めして行くという語彙テストを行い、その正答率と誤答の内容を分析している。対象語彙は『日本語能力試験出題基準』（1994、国際交流基金）の中から、日本語能力試験1級、2級の語彙をランダムに選び調整して行ったものである。その結果、中国語話者グループは英語話者グループよりも正答率が高いことが明らかになったとしている。しかし、誤答の部分を見ると、漢語に比べ和語と外来語が多く、語彙の中でも漢字で表記された漢語より、和語、さらにカタカナ表記の外来語が、誤答率が高いということが述べられている。中国語を母語とする学習者は、母語の表記（漢字）が学習目標言語である日本語語彙（漢字）を処理するのに役立っており、その経験による効果が蓄積されて語彙知識の発達を促し、日本語語彙としてはまだ十分に習得されていない段階でも、母語の表記や語彙に関する知識が役に立ち、高い正答率を出していると分析している。

また、学習者の既習外国語知識の側面から、外来語の習得課程に着目している論文が岡本（1997）である。外来語の習得に困難を感じる中国語を母語とする学習者の英語学習歴の有無を調査し、外来語習得の中間言語について分析したものであるが、調査対象とした学習者は大学院生であり、すでにTOEFLでも600～700点というスコアを取得している。当該論文では、テーブル、テープレコーダー、コーヒー、ビール等を対象語彙として調査している。調査対象となった学習者は英語の意味も理解しており、学習動機も高いが、外来語に用いられることの多い日本語の音韻要素である

促音や長音の有無は、正確に覚えなければ習得が難しく、英語の発音を習得しているがゆえに、日本語としての外来語の正確な定着は簡単ではないと分析している。

学習者が感じる学習困難点については、李・板谷（2006）も、中国人留学生を対象にした調査で、カタカナ表記による外来語が最も難しく感じる学習項目であると回答した学習者が、調査対象者50名のうち8割であったという結果を示し、それを解決するための教材開発について研究した経過を述べている。

では、どの外来語を教えたらよいかということだが、これについては、澤田（1993）において、『日本語教育のための基本語彙調査』（国立国語研究所，1984）に基づき、日本語教育における基本語彙の中からカタカナ表記の外来語を取り上げている。『日本語教育のための基本語彙調査』には、「基本語二千」と「基本語六千」があり、「基本語二千」では2.3%、「基本語六千」では4.5%が外来語に当たるとしている。それらをさらに、原語別に分類し、アンケート、エチケット、マヨネーズはフランス語から、アルバイト、エネルギー、テーマはドイツ語から、キリスト教、タバコ、パンはポルトガル語から、ガス、ガラス、コーヒーはオランダ語から、等と記述している。また、名詞だけではなく、カセット（カセットテープ）、キロ（キログラム）、スト（ストライキ）、ワープロ（ワードプロセッサ）など、略語化がおこって定着している外来語や、アルバイトする、イメージする、カーブする等、「する」をつけて動詞化されている外来語等、外来語を多様な側面からも分類し、教育のための語彙整理も試みている。

また、特定の場面に焦点を絞り研究したものが楊・後藤（2003）で、中国語を母語とする学習者がコンピュータを使用する際に障害となる、カタカナ表記の外来語によるコンピュータ用語使用における問題点の実際を観察、分析している。当該論文の取り上げている場面は、とくに大学・大学院での研究および学習過程におけるコンピュータリテラシーに関するもの

なので、大学生を対象として考える場合は、参考となる結果が記述されていると言えよう。

莫・戴(1996)における日中のインターネット用語の語彙を分類すると、1977語中、64.5%にあたる1275語が、カタカナのみの表記による外来語であると述べられており、とくにコンピュータリテラシーにおける外来語の使用頻度が高いことがわかる。例えば、「日本語(中国語)」のように記述すると、「ソフトウェア(軟件)」、「パスワード(密碼)」、「アカウント(帳戶)」、「メニュー(菜單)」等となっており、日本語では、かなりの数のカタカナ表記による外来語が用いられていることがわかる。(中国語表記は、日本の漢字を使用)

#### 4. 問題の所在

##### 4-1 中国語を母語とする学習者の言語環境

以上の先行研究から見ても、日本語教育においては、一般にカタカナで表記するヨーロッパ語からの外来語が、何らかの形で学習者の日本語習得とその中間言語に影響を及ぼしているのは間違いないであろう。そして、とくに中国語を母語とする学習者にその影響が強く出ているという観察が、教育現場からは報告されている。もちろん、学習者の大半を占めるのが中国語を母語とする学習者であるということも大きな理由であり、母数が多いだけに、中国語を母語とする学習者特有の問題のように取り上げられることも少なくない。その点についても、本稿では少し別の角度から文献にもあたり、探してみたい。

確かに、中国語を母語とする学習者は外来語が不得手であるという印象は強い。一方、同じく学習者数が多い韓国語を母語とする学習者については、外来語の習得には、大きな問題がないような印象を受ける。それぞれ

の母語を観察すると、中国語では、外国語から入ってきた語彙は、すぐに、あるいは一定の時間を経たのち、中国語そのものに翻訳され、新しい語彙となって受容される。つまり、意識という形で受容されることが多いと推察される。一方、韓国語の場合は、日本語と似た形で、あるいは、日本語から外来語そのものを輸入し、原音に近い形で受容され、いわゆる外来語として定着すると考えられる。これをもって、中国語は外来語を受容しにくく、韓国語は受容しやすい性質を持つと言ってよいのだろうか、という疑問も出てくる。

中国語を母語とする学習者は、中国出身者ばかりではない。例えば台湾やシンガポール、マレーシアの、同じく中国語を母語とする学習者を観察すると、それほど外来語に苦手意識を持っていると感じることが多いとは言えない。言語環境を見ると、台湾の場合は、國語と称される共通語である北方方言（北京語と同様の方言）と、閩南方言が主な中国語方言であり、中国語が一般的に使用されるという状況は中国とあまり変わりはない。シンガポール、マレーシアの場合は、それぞれ英語やマレー語という正式な公用語があり、その他に中国語も用いているという言語環境である。やや異なる言語環境ではあるが、台湾の場合、歴史的に日本の植民地支配を受け、日本語が使用されていた時代もあったという影響もあるが、現代中国語の使用時、あるいは閩南方言使用時にも日本語が外来語として使用されているという状況が観察される。例えば、さしみ、オートバイ、気持、おじさん、おばさん等といった名詞は音訳として受容され、その他、寿司に用いられる「のり」を示す中国語として、日本語の「海苔」という漢字をそのまま中国語読みするなど、外来語として多くの語を受容してきている。同様に、シンガポールやマレーシアでは、マレー語などの語彙が中国語使用時にも外来語として使用されているという言語使用状況が観察される。そうした状況を見ると、中国語そのものが外来語を受け入れない、とはいきれないのではないだろうか。中国語を母語とする学習者の日本語習得

を研究課題として考えるとき、以上に述べたように異なる地域で同一言語の学習者の例も考え、再考する必要があると考えられる。

#### 4-2 中国語における外来語の史的状況と受容実態

そこで、目を転じて中国語の側面から外来語をどのように捉えているのかを先行研究から見ると、以下のようなものがあげられる。まず、中国語における外来語、借用語を歴史的に観察すると、郝(2008)で分類するように、古くは秦、漢時代にサンスクリット語から入ってきた、「因縁」、「慈悲」、「世界」などがあり、その後、元、清時代にモンゴル族のモンゴル語、満族(満州族)の満語(満州語)等から入ってきたものもあるが、歴史的に長い期間だったとは言え、現在残っているものは、「胡同」(フートン、路地の意)など少数であり、多くは自然消滅したと記述されている。さらに、その後アヘン戦争以降に入ってきた借用語で、現在も使用されている語、「幽默」(ユーモア)、「模特」(モデル)などがあげられるが、そのほとんどはヨーロッパ語からの借用語である。さらに、学術用語で日本語から入ってきた、「哲学」、「経済」、「法律」などもあげられている。さらに、外来語の受容パターンとして、以下のように分類されている。( )内の漢字表記の語は中国語で、ローマ字表記の語は、中国語ローマ字による読みの表記である。

音訳 (珈琲：ka fei=コーヒー、雷達：lei da=レイダー、桑拿：sang na=サウナ)

音訳+意訳 (色拉油：se la you=サラダオイル)

意訳 (鷄尾酒：ji wei jiu=カクテル、熱狗：ri gou=ホットドッグ)

中国語への外来語導入は、音訳もあるとはいえ、その数は多くはない。しかし、現代中国語における音訳された語を見ると、流入経路が各方言で

あり、それが現在の中央語である北方方言（北京語）で使用されているという例が見られる。それについて言及しているのは那須（1987）であるが、外来語の受容パターンとしては、以下の分類を提案している。

- 音訳           （布丁：bu ding=プディング，沙發：sha fa=ソファ）  
 音訳+意識（啤酒：pi jiu=ビール，乒乓球：ping pang qiu=ピンポン）  
 音と意味を重ねる（維他命：wei ta ming=ビタミン：生命を維持する，  
     引擎：yin qing=エンジン：引いて上げる）  
 意識           （黄油：huang you=バター，汽油：qi you=ガソリン）

さらに、方言からの流入経路として、「冰淇淋」（アイスクリーム：bing qi lin）、「芝加哥」（シカゴ：zhi jia ge，アメリカ合衆国シカゴ）が取り上げられている。これらは、広州方言（広東語）を経て流入したと考えられるが、広州方言で発音すると、より原音に近い発音になると述べられており、音訳が多くはないとはいえ、方言経由ではかなり原音に近い音訳もあるということが指摘されている。同じような例は他の方言にもあり、例えば、固有名詞になるが、「勞力士：lao li shi」は時計のメーカーであるローレックスを表す語彙であるが、共通語である北方方言ではなく、呉方言である上海方言で発音すると、ほとんど原音と同様の発音となる。ローレックスが入ってきた経緯が、解放前の租界地である上海だと考えると、方言で受容された語であるということも容易に推測できる。このような例をみると、音訳で受容するということにも特段の不自然さもないと思われる。

さらに、呉（2005）では、音訳か意識か、その双方の要素を入れたものが多いのかということ論じているが、音訳は、意識ができるまでの一時的対策であり、中国語としては最終的には意識を求めることになるのだと分析しており、外来語自体に対する言語的姿勢として、母語話者である研究者の分析ということを見ると、興味深い。問題は、それが言語として



の性質等に起因するものかどうかということである。

そうしたことを現代中国における史的分析として論じたものが小林(2005)である。中国共産党機関紙「人民日報」<sup>1)</sup>に取り上げられた外来語に対する言語政策を述べるものとして、「中国固有の文字であらわすことができるものを無理に音訳する」のは「我が祖国のことばと文字が現代の物事や外来の物事をあらわす可能性を持っているにもかかわらず」、「まだ十分に利用していない」と批判しているとし、一時的に音訳するのはよいとしても、時間的検証を経れば、自ずと相応しい訳が生まれるはずだとする記事を紹介している。これは、1956年4月の、毛沢東による「百花齊放・百家争鳴」<sup>2)</sup>の提唱を受けて述べられたことだとしているが、さらに辿ると、スターリンが1949年3月の「新聞にいかん論文を書くべきか」というソ連共産党機関紙「プラウダ」<sup>3)</sup>紙上の文章で、「できるだけ外来語を使わぬように」と記したことを指摘している。さらに、1950年7月の「人民日報」では、スターリンの論文「言語学におけるマルクス主義の問題について」(同年6月「プラウダ」に発表)を掲載しているが、1920年代から言語計画を持っていたのはソ連だけであったと言われる中、こうした社会主義における関係上、中国が言語政策の根幹としたのがソ連であると言及している。中国が「ソ連に学べ」という体制をとっていた歴史的経緯もあり、外来語は音訳ではなく、自国の言語で表現すべきであるという姿勢がここで形作られたという分析は非常に興味深い。

こうして資料にあたりながら史の変遷を見て行くと、中国語に音訳である外来語が少ないのは、言語的性質上や、あるいは表記上の問題に起因するというよりも、言語政策上受容してこなかったと考えるべきであろう。

つまり、中国語を母語とする学習者がカタカナで表す外来語の学習が不得手だといっても、それは言語の特性上不得手だというのではなく、そのようにコントロールされた言語的環境ゆえに、音訳の外来語を使う機会がなかったので不得手になってしまったということなので、学習項目をそれ

なりに与えればきちんと習得できる可能性は大いに残っているとみてよいであろう。

## 5. 現代中国語における外来語の実際

2008年の北京オリンピック、2010年の上海万博等を経て、中国は外国の文化受容に関しても大きな転換点を過ぎ、語彙の面でも変化が表れてきていると思われる。とくに、ここ数年、インターネットの環境が整ってくるにつれ、一般の人々もネット環境を持ち、とくに若年層についてはソーシャルネットワーキングにアクセスするのが日常の行動にもなり、ブログやホームページなどに関する新しい語が次から次へと流入し、ある語彙が辞書などに載る間もなくすたれ、そして次の語が出現してくるとというのが昨今の現実である。

現時点では、ネット関係の語彙が、かなり中国語にとっての外国語受容の観察対象になると考えられるので、いくつかその実例を見ながら、外来語受容の傾向を観察したい。

まず、ネット関係の主な語彙とその中国語訳をあげてみると以下のようになる。( )内は日本の漢字による表記と中国語のローマ字読みの表記である。

ネット	网（網：wang）
eメール （伊妹兒：yi meier）	电子邮件（電子郵件：dianzi youjian），伊妹兒
ホームページ	首页（首頁：shou ye）
コンピュータ	电脑（電腦：dian nao）
ブログ	博客（bo ke）
ミニブログ	微博（wei bo）
プリントアウト	打印（da yin）
ソフト	软件（軟件：ruan jian）

これらの中国語訳を音訳と意識に分けてみると、次のようになる。

音訳	伊妹兒：eメール 博客：ブログ
意識	网：ネット 电子邮件：eメール 打印：プリントアウト 软件：ソフト
意識+音訳	微博：ミニブログ

ここでは限られた数の語彙をあげただけなので、それぞれの割合に言及することはできないが、概観しただけでも意識が多いように見受けられる。また、eメールのように、意識をしていたものが、現在では多くの場合 e-mail の発音に近い音訳（伊妹兒：yi mei er）を使用するようになったという例もある。この例では、通例に見るように、最初音訳が取り入れられ、一定期間を経て中国語訳が定着する、という順序とは逆の受容パターンに

なっている。そのようなことから考えると、外国語の原音のまま受容するという点にも抵抗がなくなっているということと、中国の言語政策の「なるべく我が国の言葉で」という拘束力がそれほど強くなってきているのではないということも推測できる。もちろん、意識で定着している語は多くの組み合わせを持ち、例えば「网」（網，ネットの意）などは、

网吧（网吧：wang ba, ネットカフェ）、

网线（網線：wang xian, ケーブル）

などのようにも用いられている。その他、若年層のネット上の用語では、中国語の発音を表わすものであれば数字も用い、88 (ba ba, バイバイ) のように挨拶にも使っている。これは、中国語の数を表す八の字の発音が、国際音声記号で表記すると [pa]（無声無気破裂音、日本語のパに近い）となり、バイバイのように響くので用いられていると考えられる。つまり、音訳のような受容の仕方が自然発生しているということでもあり、中国語母語話者が音訳にアレルギーを持っているわけではないということが再確認できる例であろう。

したがって、日本語教育の中でも、カタカナ表記による外来語は、その教材を整え、導入シラバスを用意すれば、中国語を母語とする学習者の習得にも効果がみられると期待できると思われる。

## 6. 教材における外来語のあつかい

学習者の立場からはどのように日本語におけるカタカナ表記の外来語を扱おうとしているのかを見るために、中国における日本語教育での日本語外来語の指導とその教材で扱う語彙などに着目して述べることにする。

中国での日本語教育は、それぞれの教育レベルにおいて、教育部が作成した学習指導要領によって行われている。そのいくつかを見てみると、カ

タカナ表記による外来語の導入も概観できる。

中国では、その教育課程別に異なる学習指導要領が設けられており、とくに大学における日本語教育では、専門科目としての日本語と第二外国語としての日本語に分かれており、教師会、学会、教科書まで、すべて両者は分かれている。

中等教育段階の日本語シラバス『日語過程標準』には、中等教育で日本語を教育する際の基本語彙800語が載せられているが、そのうちカタカナ表記による外来語は、アパート、ケーキ、コップ等、36語である。そのうちコンピュータ関係の外来語は「パソコン」1語である。

次に、大学における第二外国語としての日本語の場合、『大学日語過程教学要求』をみると、1300語彙を第二外国語としての日本語教育の基本語彙としているが、そのうち423語がカタカナ表記による外来語である。これは全体の約三分の一にあたることから、外来語を基本語彙として重視していると見ることができよう。

## 7. おわりに

中国語を母語とする日本語学習者にとって、カタカナ表記による外来語習得が不得手だという印象は、さまざまな側面からの観察、調査による先行研究で、実際に論じられ、印象通りの結果が出ていることがわかった。そして、本稿では、その要因が中国語という言語の特性によるものだというよりも、むしろ、自国語に外国語を取り入れる際、音訳を避け、意識を促進してきた言語政策にあるようだと考察した。

言語政策によるものという、いわば環境の要因からもそれは説明できたが、さらに、習得理論の側面からも説明できる。日本語語彙の多くを占める漢字表記による漢語は、中国語を母語とする学習者からみれば母語の知

識を動員してその処理をおこなうため、学習自体に負担や抵抗をあまり感ずることなく、語彙学習が進められると思われる。しかし、漢字表記ではなく、カタカナ表記による外来語習得では母語の知識を役立てることができず、また、漢字表記による語彙とのギャップも手伝い、必要以上に習得が困難であると思ってしまうのではないだろうか。

以上のような背景を持つ学習者だということをふまえ、初級の早い段階からカタカナ表記による外来語を導入し、心理的抵抗を少なくするような学習方法をとることが有益ではないかと思われる。とくに、現在ではコンピュータリテラシーに関する用語等は、中国においても音訳した語彙を收容しているという状況もあるので、そうした語彙を積極的に取り入れた教材の組み立てをすることも、外来語を多く導入する方法の一つとして考えられる。その他、副教材として外来語が数多く出てくる内容の文を用意することも有効かと思われる。たとえば、服装、ファッションに関する内容、化粧品、薬品に関わる内容などが外来語の頻出内容として考えられよう。今後はさらに、上記のような具体的語彙を集めた具体的教材を提案して行く方向を模索したいと思う。

## 注

- 1) 中国共産党機関紙。1948年創刊。
- 2) 1956年、最高國務会議で毛沢東による、「共産党への批判を歓迎する」という提唱。さまざまな文化を開花させ、みなが自由に有益な意見を述べあうということを表している。
- 3) 旧ソヴィエト連邦共産党機関紙である新聞。1912年、レーニンによって創刊された。プラウダとはロシア語で「真実、正義」の意。中国語では「真理報」と意識されている。

## 参考文献

岡本佐智子 (1997) 「外来語の習得ストラテジー：中国で学ぶ中国人研究者に見る外来語の中間言語」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』23 東京外国語大学

- 郝苗苗 (2008) 「中国語における外来語の受け入れの概要」『人間文化研究』6 長崎純心大学
- 教育部高等学校外語專業教学指導委員会日語組教学大綱研訂組 (2000) 『高等院校日語專業高年級階段教学大綱』
- 教育部高等学校大学外語教学指導委員会日語組 (2008) 『大学日語課程教学要求』高等教育出版社
- 国際交流基金 (1994) 『日本語能力試験出題基準』国際交流基金
- 国立国語研究所 (1984) 『日本語教育のための基本語彙調査』国立国語研究所
- 呉大綱 (2005) 「中国語の中の外来語：音訳か意識かそれとも音訳と意識のミックスか」『梅花女子大学文化表現学部紀要』 梅花女子大学
- 小林以及 (2005) 『『人民日報』における外来語に関する記事』『日中言語文化』桜美林大学
- 澤田田津子 (1993) 「日本語教育のための基本外来語について」『奈良教育大学紀要』42 (1) 奈良教育大学
- 秦延通編 (2002) 『日中外来語辞典』 東方書店
- 陣内正敬 (2008) 「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」『言語と文化＝語言与文化』11 関西学院大学
- 鈴木義昭, 王文編 (2002) 『日本語から引ける中国語の外来語辞典』 東京堂
- 大学日語教学大綱修訂組 (2000) 『大学日語教学大綱 (第二版)』
- 中華人民共和国教育部 (2002) 『日語過程標準』
- 赵华敏** (趙華敏) (2006) 『初級日語』 北京大学出版社
- 日語專業基礎階段教学大綱研訂組 (1993) 『高等院校日語專業基礎階段教学大綱』
- 莫邦富, 戴嶸 (1996) 『日英中戴对照 中国語インターネット用語集』 ジャパンタイムズ
- 堀場裕紀江, 小林ひとみ, 松本順子, 鈴木秀明 (2008) 「第2言語学習者の言語知識と読解における母語背景の影響」『言語科学研究』14 神田外語大学大学院
- 水谷修監修 (2000) 『日英中韓カタカナ語見くらべ字典』 講談社
- 楊峰, 後藤寛樹 (2003) 「日本語非母語者のコンピュータ使用における問題点：中国語母語者の例を中心に」『富山大学留学生センター紀要』2 富山大学
- 李峰栄, 板谷雄二 (2006) 「中国人向けカタカナ語eラーニング教材の開発と視覚的刺激の有効性の検証」『朝日大学経営学部電子計算機室年報』15 朝日大学
- 那須清 (1987) 「中国語の中の外来語」『語学研究』10 神奈川大学

本稿は、平成20、21年度専修大学研究助成による研究成果の一部である。